

第一信号系の特性

平井慎二

逸脱した行動や不快な自律神経症状、気分を反復して生じさせる反射を抑制し、抑制された状態を保つために、対応すべき特性を第一信号系はもつ。それらは、先天的な反射は可塑性が低く、後天的な反射は可塑性が高いという差異があること、ならびに行動の駆動性を過酷な体験が高めること、頻回に生じた反射は抑制されても放置により回復することである。

1) 先天的な反射と後天的な反射の可塑性の差異

環境の変化や治療的対応により、動物がある時点でもつある反射は未来の一時点までに変化する。その変化の早さは、その反射がそれまでに反復されてきた期間および回数、頻度等による。

本能行動を司る反射連鎖の本流となる先天的な反射は、遺伝子を通じて前世代から受け継いだものであり、世代を越えて長期に存続し、数多く作動してきた反射である。その反射は進化的に変化するのであり、1代では目に見える変化は生じず、治療的対応で変化させられない。

一方、後天的な反射は各個体の生後に形成されたものであり、可塑性に富み、各世代で状況の変化により大きく変化するものであり、治療的対応で容易に変化する。

2) 行動の駆動性に影響する生育環境

第一信号系は生命を支えた行動を再現する中枢である。危機的状況に対して生きる方向の行動を司る反射が作動する性質をもつ動物が生き残ってきた。その性質により、危機的状況に対して生き延びた行動が生じ、生き延びたのであるから防御に成功し、生理的報酬が生じ、生き延びた行動の再現性が高まる。

未成年期に家庭の構成員間の不和、饑餓、貧困、家庭内や学校、その他での虐待、大病、事故、災害、戦争などの危機的状況を体験したヒトは、日常的に生じる、あるいは継続する、あるいは単発の危機的状況を生き延びたのである。したがって、そのようなヒトがもつ第一信号系は生きる方向への行動を司る反射が早く強く生じやすく、日常のさまざまな出来事に過敏であり、些事に対しても激しい反応が生じ、第二信号系の制御を越えた行動が生じ易い。

逆に平安な家庭で無事に生育したヒトは、未成年期を周囲から刺激にゆっくりと反応することで生きてきたのであり、後にも日常のさまざまな刺激に対して穏やかに反応し、第二信号系が優勢である精神状態で行動する成人になることが多い。

3) 抑制後の放置による元の反射の回復

地球の自転軸は公転軸に対して傾いており、それが地球に季節を生じさせている。ある季節で生命を支えた行動はその季節で頻回に反復される。

次の季節では、前の季節から残った同一の刺激に対して同じ行動が当初は生じるが、環境が変化しているために、生命を支えることに失敗して生理的報酬が生じず、元のある季節で生命を支えた行動を司った反射は抑制が進む。

季節がめぐり、環境が大きく変化し、元のある季節で生命を支えた行動を司った反射に対する刺激がない季節になり、その季節では、元のある季節で生命を支えた行動を司った反射は刺激されず、放置される。

元のある季節で生命を支えた行動を司った反射がどのように変化するかを、放置された間に反射の回復が良好な群と放置された間に回復が不良な群の両方を想定して、次のように推論した。

回復が良好な群は、また、季節がめぐり、元のある季節に戻ったとき、環境に適応した行動が反射で生じ、生き延びた。

回復が不良な群は、また、季節がめぐり、元のある季節に戻ったとき、環境に適応した行動が反射で生じ難く、生きる競争に負け、絶滅した。

生き延びた群が現生の動物であり、現生の動物は生き延びた群の性質をもつ。つまり、現生の動物の第一信号系において、一時期、頻回に成功した行動を司った反射は、後に抑制されても、刺激されず放置されれば、その間に反射は良好に回復する性質をもつ。